



企画委員から

平和を紡ぐ一年に 一戦地を歩いた祖父の言葉から

やまき ゆみ
八巻 由美 ●自治労 総合企画総務局長兼国際局長



陸軍歩兵第65連隊は、兵員のおよそ半分を福島県出身者が占め、戊辰戦争の「白虎隊」の名を受け継ぎ、「白虎部隊」と呼ばれた精銳部隊。昭和19年には陸軍最大規模の「大陸打通作戦」に投入されました。この作戦は、中国大陸を南北につなぐ輸送路を確保し、日本本土への空襲を防ぐため米軍基地を制圧することを目的としていたようです。

私の祖父も、この第65連隊に属し、中隊長として若い日々を過ごしていました。私が就職して間もない頃、家族の夕食時に祖父が「もう一度あの場所へ行ってみたい」と静かに言いました。

旧満州——祖父が青春を戦争のために捧げ、多くの仲間が命を落とした土地です。祖父自身も「生きて帰れる保証はなかった」と語っており、その思いに寄り添いたいと思い、私は祖父とともにその地を訪れました。

現地には、当時をわずかに思い出させる建物が残りつつも、新しい街並みも広がっていました。時がたち、細かな記憶は薄れていますが、祖父は何度も立ち止まり、静かに周囲を見渡しながら「爺ちゃんもここで死んでいたかもしれない」と私に語りました。その言葉の裏には、かつて共に過ごした仲間への思い、二度と戻れない日々への悔しさや哀しみ、そして極限の中で生き抜いた青春の重さがあったのだと思います。

祖父の姿を思い返すと、「戦争は二度と起こしてはならない」という言葉の意味を深く考えさせられます。武力での解決は必ず誰かの未来を奪い、日常を壊してしまいます。祖父の世代が経験した現実こそ、その厳しい教訓です。しかし、今の世界には、不安や緊張が静かに満ち始めているようにも感じます。互いの違いに敏感になりすぎ、対立の影が広がり、気づかぬうちに当時の空気に近づきつつあるのではないか——そんな危機感を抱くことがあります。

だからこそ、過去を学ぶことの意味は大きいと改めて思います。祖父は「生きているのが不思議で申し訳ない」「亡くなった仲間の上に今の自分がある」と口癖のように言っていました。その言葉は、平和は偶然ではなく、守る努力によって支えられているということを私に教えてくれました。

祖父と訪れた旧満州の旅は、歴史の重さと同時に、今を生きる私たちに託された思いを感じる時間でもありました。

過去を知り、語り合い、互いを認め合うことが、平和への確かな一歩になるのだと思います。祖父の願いを胸に、争いのない日常を大切にしながら、次の世代へと穏やかな未来をつないでいきたい。新しい一年が、笑顔と対話に満ちた平和な年となることを心から願っています。